

第 13 回経済学史学会研究奨励賞受賞作講評

本賞 安藤裕介『商業・専制・世論——フランス啓蒙の「政治経済学」と統治原理の転換』

創文社，2014 年

論文賞 Norikazu Takami, “The Sanguine Science: The Historical Contexts of A. C. Pigou’s Welfare Economics,” *History of Political Economy*, 46: 3 (2014)

第 13 回経済学史学会研究奨励賞の受賞作に上記の 2 点が決まった。ここ数年、論文賞の該当作がなかったが、今回は本賞 1 点、論文賞 1 点がそれぞれ選ばれた。内容については、本賞が経済学の古典期のフランスを対象としており、論文賞が 20 世紀の経済学のお膝元ケンブリッジに関するものであって、手法も前者が思想分析に力点を置き、後者は実証的考察が主となっており、時代やアプローチの仕方においてバランスのとれた受賞となった。若手研究者が多様な研究方向を模索していることを示唆していると言えよう。

本賞作である安藤裕介会員の著書は、18 世紀のフランスでは、「政治経済学」は 19 世紀以降とは違って、狭い意味での経済学ではなく統治原理や社会編成の議論と切り離せない内容を有していたという立場で論が展開されている。つまり、l'économie politique の politique の独自の意義に力点を置いて問題が論じられている。政治学をもととの学的基盤とする著者に同時の問題設定であるが、そのような全体を通底する大きな枠組みの下に、具体的な論点として取り上げられるのが、当時の主要な政治経済学者たちが関心を示した、穀物取引の問題であった。こうして一方での分析視角としての「政治的なもの」と「経済的なもの」の分離と交錯、他方での分析対象としての穀物取引論争という二つの視点から、ケネー、ル・メルシエ・ド・ラ・リヴィエール、チュルゴー、コンドルセ、ネッケル等の言説が取り上げられるのが本書の内容である。

第 2 章以下で上の思想家たちについて順次、論じられているが、第 2 章は、ケネーの政治経済学では、完全な競争秩序が、専制的で強力な政治権力の後ろ盾によって可能になることが主張されている点を説明している。第 3 章ではラ・リヴィエールに関して、彼が言う「明証性」や「意見」について検討され、ラ・リヴィエールにおいては、自由な討論が、異なった立場の調整では

なく、客観的に成立する法則・真理の証明手続きである点が説明されている。第4章では、主としてチュルゴーが、その友人のコンドルセと共に対象とされている。ここでは、チュルゴーが論証と説得を通じて穀物自由化を推進しようとしたこと、しかし、そうした理性の言葉に民衆は耳を傾けなかった状況に対して、コンドルセが政治経済学を精密科学に高めようとしたことが論じられている。第5章では、ネッケルの自由化慎重論が取り扱われている。ネッケルは民衆の意見を偏見として斥けるのではなく、有意性のある社会的事実として受け止め、当時の現実の市場に存在する立場の非対称性等の特徴をすどく分析したのであった。

このように要約できる本書の大きな特長は、分析視角の明確さと新鮮さにある。旧来、本書で対象とされる思想家たちについては、基本的にその経済学が問題にされてきたが、本書では著者の学問的出身母体に照応して彼らの広い意味での「政治的なもの」に自覚的に光があてられている。その結果、「重商主義か重農主義か」といったようなこれまでの定型化された分析視点からは異なる新たな側面が明らかになった。意見や世論への着目はその例だが、そういう概念を通じた特にネッケルについての考察は優れたものと言える。他方、本書のもう一つの分析基軸となっている穀物取引にかんしては、特に第2、3章で、ケネーやラ・リヴィエールの所論において穀物取引論がどのように位置づけられるかについて、具体的な説明が必ずしも十分与えられていないように思われる。

* * *

次に高見典和会員の論文賞であるが、受賞作はケンブリッジ学派の経済学者ピグーを取り上げ、彼の厚生経済学を生み出した、当時のイギリスの時論的文脈を明らかにしたものである。従来、ピグー経済学は理論史的流れの中で問題にされることが多かったと思われるが、本論文は、20世紀初頭のイギリスの現実の中で、ピグー経済学に結実する彼の大学での活動や、政治的諸問題との関わり合いを微細に描いているのがおおきな特色と言える。

本論文の根幹部分は4つの節から成っているが、第1節では、ケンブリッジ大学入学から、大学内の人間関係の渦の中で経済学教授着任を果たすまでのピグーのキャリア形成が説明されている。第2節では、上に述べた大学内でのキャリア形成と並行してピグーが関与した、当時の関税論争が取り扱われている。植民相チェンバレンによる関税改革をめぐる新聞や雑誌でさかんな議論がかわされたが、ピグーも経済学の専門家としてそこに参加した。彼が自由貿易の立場から、関税賛成派の政治家や歴史派経済学者たちに対して論陣をはった仔細が説明されている。第3、4節は社会主義の問題が論じられ、第3節では、19世紀後半以降のイギリスで高まってきた社会主義的な動きに対して、それに対抗する反社会主義者について検討され、その代表的人物であるハロルド・コックスとピグーの間の、地租をめぐるやり取りが紹介されている。第4節では社会主義支持派に焦点をあて、主にケンブリッジ大学フェビアン協会をめぐる活動が説明されている。ウェルズ、バーナード・ショー、ウェップ夫妻等といったフェビアン協会の著名人たちがケンブリッジで講義や討論集会をしたことや、ケンブリッジ大学内でのフェビアン協会と経済学(者)

との密接な人的関係について、詳しく紹介されている。

こうした内容の本論文の優れた点は、第一に、分析視角が明快な点である。筆者は別稿（『経済学史研究』55-2）で近年の科学社会論への関心を示しているが、「科学における社会的文脈」に着目する科学史・科学哲学での研究手法を、社会科学の中では自然科学に最も親近性あるディスプリンとしての経済学に巧みに応用したと言えよう。そして第二に、そうした枠組みの中で同時代のケンブリッジ大学に関連する資料を丹念に渉猟し、的確に利用している点も評価できる。他方で、本論文では大きなウェイトが置かれている社会主義に対するピグーのスタンスが必ずしも判然としない憾みがある。ピグーは「けっして社会主義者ではなかった」ことと、彼の「進歩的」、「楽観的な」立場とがどのような関係にあるのか、いま一步、踏み込んだ分析が必要ではないだろうか。

二つの作品とも明確でかつ清新な分析視角に基づいて対象に接近する姿勢が明瞭である。著者自身の研究の進展との関連では今後の発展を期待させる内容であるし、ひろく経済学史研究への寄与という点では、他の若手研究者への一つの手引きとなる業績であり、研究奨励賞に値するものと評価できる。

2016年5月23日

経済学史学会
学会賞審査委員会